

第47回 鳥取市文化賞受賞者

すずき きみひろ
鈴木 公弘〔文芸（川柳）〕



【受賞理由】

40年近く川柳などの実作と研究、指導にあたり、県内外に広く知られる。

43歳の頃、日本海新聞柳壇に初投句、いきなり天位(第一位)を取る。その後、県内外の大会に投句、次々に入賞。作品は「真・情・美」に基づいた社会性のある作風が特徴。

平成3年には「くろぼこ川柳会」を立ち上げ、平成11年には日本海新聞柳壇選者、茗人賞選考委員となる。平成22年には全日本川柳鳥取大会の実行委員長を務め、全国から約600人の参加者があった。その後も、国民文化祭・きょうと大会や川柳展望全国大会(大阪)の選者を務める。

個人句集として「川柳作家全集・鈴木公弘」(新葉館出版)があるほか、総合雑誌「川柳マガジン」(平成27年)に作品100句と川柳論の特集が組まれるなど、全国で活躍している。

【経歴】

最終学歴 法政大学大学院社会科学部私法学専攻博士課程単位取得(修了)

職歴 労働法学、法社会学の研究に従事。日本労働法学会委員ほか歴任。学位論文ほか学術論文等複数。Uターン後は、民間会社監査役を経て気高町役場に入庁。役場退職後、(社福)あすなろ会参事。

【受賞歴】

(県内)鳥取県知事賞、鳥取県議会議長賞、米子市長賞、茗人賞準賞他。

(県外)兵庫県篠山市教育委員会教育長賞(全国大会)、青森県こけし川柳大賞他。

【主な活動】

(主な文芸活動歴)

平成 元年10月より短歌、川柳の独学自修を始める(のちに川柳に専念)。

平成 3年 1月 川柳結社『くろぼこ川柳会』創立(気高町)、現在に至る。
全国結社「川柳塔社」同人・理事(現在に至る)・『路郎賞』
『川柳塔賞』選考委員歴任。

全国結社「川柳展望社」会員・『展望賞』選考委員(ともに現在に至る)。

平成 3年12月 川柳大会初選者。

平成 9年 鳥取県川柳大会実行委員長(参加者数史上最多)。

平成10年度 鳥取県「一県民一文化」事業に伴う鳥取市教育委員会主催
「川柳講座」講師。

平成11年 6月 日本海新聞『日本海柳壇』選者および茗人賞の選考委員に
就任、ともに現在に至る。

平成13年 4月 第1回『春はくろぼこ川柳大会』開催、現在に至る(今春第
22回開催)。

平成20年12月 一般社団法人全日本川柳協会常任幹事。

平成22年 6月 (一社)全日本川柳協会主催『第43回全日本川柳2010鳥取
大会』実行委員長。

平成23年 1月 川柳結社『川柳同友会みらい』(鳥取市)創立、会長として

現在に至る。

平成3年、平成23年の川柳会創立以来発行してきた柳誌(県内唯一)の名称を『川柳いのちの詩』と改題し、現在に至る(今月、通巻377号発行)。

平成23年度 国民文化祭きょうと川柳の祭典選者(文科大臣賞・京都府知事賞の作品を選抜)。

平成7年度 国民文化祭かごしま薩摩川内こころの川柳大会選者(佳作賞選抜)

平成29年6月18日 (一社)全日本川柳協会理事(現在に至る)。

(この間、100を超える川柳大会選者を歴任、現在に至る。)

(出版)

個人川柳集『川柳作家 鈴木公弘』(新葉館出版)、年内に同社より別の句集発刊予定。

合同川柳集(鈴木公弘企画編集発行) 第I集『樹』・第II集『感性は我にあり』・第III集『そして。いま。』・第IV集『槌の音』(10月予定)

他者川柳集のプロデュースおよび編集。

(その他の主な文化活動)

平成5年度 文部省助成事業により『逢坂音頭』作詞(日本著作権協会・作詞部門登録)→宝塚歌劇団の協力により歌唱(テープ化)、舞踊振り付け。発表会開催。地区運動会(地区公民会主催)で総踊り。

平成19年 気高町主催『気高町民の歌』選考委員長(歌唱・紙ふうせん)。現在11時30分を知らせるメロディとして旧気高町全域に毎日流れている。

平成19年～平成21年度

鳥取県教育委員会「国語科」特別講師(小学校で短詩文芸を教える)。

【作品に対する思い】

主に伝統川柳の「穿(うが)ち」作品。

- ・新聞初投句「米と炊く大根はもう作らない」(1989年10月日本海柳壇・天位)
- ・全国大会初投句「橋脚を刺されて島はいつ眠る」(1990年1月NHK広島大会・秀作賞)

【活動に対する思い】

川柳活動を通して平和に理念を貫き、人間の真実、情愛、美意識を作品として表現する「いのちの詩」である、と説いている。

【現在】

全日本川柳協会理事、鳥取川柳連盟会長、「川柳同友会みらい」主宰のほか、日本海新聞柳壇選者および茗人賞選考委員を務める。